

《論 説》

明治後期の岡山県一農村における
農村民の生活事情

——日本産業革命期の地域民衆生活の検討——

神 立 春 樹

目 次

- 1 本稿の課題
- 2 西高月村の概況
- 3 農業の状況
- 4 農業経営状況
- 5 農村民の生活事情

1 本稿の課題

本稿は、岡山県赤磐郡西高月村の「村是」(『岡山県赤磐郡西高月村是調査書』西高月村農会 1905年—明治38年—発行 調査時点1904年、ただし農業のみ1903年)によって、この西高月村における農村民の生活の状況を検討し、これによって産業革命研究の究極的課題である日本産業革命の展開にともなう民衆生活の変容の実態を究明する手がかりをうることを意図するものである。

産業革命研究の究極的課題が産業革命の進展にともなう民衆生活の実態の究明にあることについては、ここにあらためていうまでもないことであろう

が、本稿においては地域民衆生活というように、地域的把握を行なうことの理由はつぎのごとくである。さて、民衆生活というときの民衆はいずれも特定の地域において生活するのであるが、日本近代の民衆が立脚する地域は、日本の近代化・資本主義化過程の特質に規定された特異な地域構成における地域なのである。資本主義の確立・発展にともない近代工業都市が成立し、都市と農村の乖離・対抗が生ずるが、わが国の場合はこの工業・都市と農業・農村の関係自体が特異であり、さらに著しい中央集中によって生ずる中央と地方の対立、そしていわゆる「表日本」「裏日本」などの地域格差が発生してきている。⁽²⁾したがって、資本主義の確立にともなう民衆生活の実態の究明ということは、まずは個別地域ごとの検討として開始せざるをえないのである。

ところで、経済史・歴史学における民衆生活の把握ということについていえば、消費生活をも含めた実態の把握は著しくたちおけているといわざるをえない。衣食住をも含めての民衆生活の実態の把握という問題意識をもつことの希薄さによるであろうが、同時にこの民衆生活レベルのことからは産業・経済のように統計的把握がなされていないというようなことからくる資料的事情もその一因となっているであろう。このような事情のなかで民衆生活レベルの問題の検討を熱誠に行なってきたのは民俗学であり、その膨大な成果からは多くの教えを受けることができる。しかしながら民俗学の場合には変容しつつあるなかに貫かれている伝来的なものの究明が第一義的課題となるのである。したがって例えば資本主義の確立にともなう民衆生活の変容面の検討ということを直接的課題としているとはいいがたい。いま筆者が対象としている岡山県についていえば、これまでの膨大な研究成果を基礎として作成された、最近の『岡山県史 民俗篇』は民衆の生活諸側面を対象とし

(1) 石井寛治「産業革命論」(石井他編『近代日本経済史を学ぶ 上(明治)』1977年 東京大学出版会 所収) 参照。

(2) 神立春樹「産業革命と地域社会」(歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史 8 近代2』1985年 東京大学出版会 所収)。

ているが、そこでとりあげられている衣食住についての関心は、いずれも変容しつつあるなかを貫く伝承性の検証にあるように思われるのである。

このようななかで、本稿は、消費生活をも調査の対象としている「村是」を主要史料として、岡山県という日本資本主義の成立期において「先進地域」に位置し、「表日本」の一典型ともいべき地域における一農村の農村民の生活事情について検討し、これを通じて日本産業革命期の民衆生活の実態究明の手がかりをうることを意図するものである。

ここで、この「村是」の史料としての性格について概略記しておこう。この「村是」については、つぎのごとき解説がある。⁽³⁾これは明治30年代から大正中期にかけて各町村でつくられた実態調査書である。一般に「現況」・「参考」・「将来」の3部よりなり、町村経済全般の収支、戸口、土地所有、農業はじめ各種産業、労働力、物価、教育、娯楽、地主会、基本財産蓄積などに関する各種の統計、調査結果を掲げ、これをもとに町村の未来図を描き、その実現のための年次計画をつくり、実施していくことを「町村是」としようとするもので、現実の資本主義の展開と商品経済化に適応させることによって農村の救済と発展をはかろうとしたもの。明治・大正期の地方の農・商・工業の統計、産業統計をうかがうための貴重な資料である。農村振興を叫ぶ前田正名が1893（明治26）年に提唱し、その後、農村危機の深化に応じて地主＝農会を中心にこれがうけとめられ、各地に町村是調査委員会が組織された。村是・町是・郡是を編集され、これをもとにやがて国是をも定めようとする運動となった。1903（明治36）年の第5回内国勧業博覧会（大阪）には約300点が出品された。その後、各府県や郡が町村是調査を訓令することも多く、農

(3) 木槻哲夫「町村是」(大塚史学会編『新版 郷土史辞典』1969年 朝倉書店 所収)による。なお、大橋博「明治町村是と福岡県」(同氏『地方産業の発展と地主制』1982年 臨川書店 所収)、『「郡是・市町村是」資料目録』(1982年 一橋大学経済研究所日本経済統計文献センター)における編者高橋益代の解題「「町村是」資料について」などを参照。

政の一環として町村是設定運動はさらに拡大した。そしてこのことを通じて農会＝地主階級が地方行政・産業施策上に大きな発言力をもつようになった。以上のごとくである。各種産業統計としては府県統計書があるがこれは郡市単位である。これに対して「町村是」は各町村ごとの資料として重要であり、上述解説にもそのことが強調されているが、さらに注目すべきは消費に関する資料を含むことである。この西高月村の「村是」について言えば、「現況ノ部」、「参考之部」、「将来ノ部」の3部からなる「村是」の「現況ノ部」第十一章 支出は、第三節 家計費、第四節 家計費総額、などである。生産、不生産（利子・小作料など）、負債などととも、1戸あたり、1人あたりの収入、支出状況の検討が可能となるのである。この点においてこの「村是」はいうそう貴重なものである。

この「郡是・市町村是」の岡山県についての所在状況であるが、『「郡是・市町村是」資料目録』（1982年 一橋大学経済研究所日本経済統計文献センター）に現存するものとして記載されているのは、都窪郡の「郡是資料」（1908－明治41－年4月発行・1907年12月現在）、苫田郡の「郡是資料」（1911－大正10－年4月発行・1909年現在）とこの西高月村の「村是」の3点のみである。同目録によると、第5回国内勧業博覧会「審査報告」には「御津郡建部村是」など16点、それともう一点の出品目録記載があるが、所在は不明であるとのことである。この西高月村の「村是」が岡山県では町村⁽⁴⁾レベルでの唯一のものようである。

（4）〔野田千太郎編纂〕『市町村是』（1898年 市町村雜誌社）には、「岡山県小田郡北川村治」「岡山県赤磐郡湯瀬村治」「岡山県和気郡三国村治」が収録されているが、文章叙述だけのきわめて簡単なものである。また、「山陽新報」の明治38年2月4日に、「治蹟優良町村」という見出しで「岡山県にては過般管内町村にして治蹟優良に自治機関の発達を認むべき者数町村を選び詳細之を記述して内務省地方局に報告したり 其全文は左の如し」として、児島郡八浜町の記事があり、2月5日に八浜町の続き、2月7日に児島郡小串村、2月8日に上房郡上竹庄村、2月10日に久米郡大井西村に関する記事がある。町村是の類とみなすことができようが、スペースは数段のものである。

2 西高月村の概況

西高月村は赤磐郡の西南端に位置し、南は上道郡、西は旭川を隔だてて岡山市も属していた御津郡に接している。1926（大正15）年に高月村と改称、1953（昭和28）年に高陽村、西山村と合併して山陽町となる。この際、そのうちの牟佐は岡山市となる。以下、「村是」の記述によってこの西高月村の概況を記す。南と北にともに東西に走る山並にはさまれた、地質良好、平坦穏やかな村である。延喜式に高月駅とある古くからの宿駅であり、備中国分寺趾がある。中央を街道が通り、西は旭川対岸の中国鉄道の玉柏駅にいたり、東は山陽鉄道の瀬戸駅に達する。旭川の水運はここから岡山三蟠港に達し、また遡航して美作にいたる「郡中の咽喉部」にあり、「本郡ノ輸出入ノ過半ハ此ノ水陸運輸交通機関ニ頼ルモノ少ナカラス」という。田241町9反3畝歩余、畑45町4反7畝歩余という水田地帯であるが、北方の山腹の国有林を含めた541町7反3畝余の山林がある。なお、後年であるが、1927（昭和2）～31年の5カ年の水稻反収は2.533石で、全県の2.058石、赤磐郡の2.267石より高い（高陽村2.612石、西山村2.502石）⁽⁵⁾。

職業構成をみると（第1表）、農業69.7％、商業13.1％、工業5.4％、雑業

第1表 西高月村職業別戸数および営業戸数 (1904年)

	職 業 別 戸 数				営 業 戸 数			
	専 業	兼 業	①合計	比 率	②他業からの兼業	総営業戸数	比 率	②／①
農 業	266 ^戸	132 ^戸	398 ^戸	69.7 [%]	94 ^戸	492 ^戸	44.0 [%]	23.6 [%]
商 業	41	34	75	13.1	212	287	25.0	282.7
工 業	24	7	31	5.4	16	47	4.2	51.6
雑 業	40	27	67	11.7	225	292	26.1	335.8
合 計	371	200	571	100.0	547	1,118	100.0	95.8

註 1) 『岡山県赤磐郡西高月村是調査書』（1905年 西高月村農会）より作成。

(5) 各年度の『岡山県統計書』より作成。

11.7%となっていて、農業戸数が約7割である。他業から農業を兼ねるものが94戸あり、これを加えると86.2%が農家であるという農村である。しかし他業から商業を兼ねるもの212戸、同じく他業から雑業を兼ねるもの225戸、他業から工業を兼ねるもの16戸があり、合計547戸の他業からの営業があることになり、1戸がほぼ2営業ということになる。特に商業、雑業を兼ね営むものが多いが、この他業からの兼業者のうちでその数の多いのは、雑商・菓子商・相物商・油類小売・煙草商・砂糖商・紙商・履物商、出稼・漁業者・日雇稼などである。商業、工業、雑業に34、7、27、の他業を兼業するものがあるが、他業を兼業するものが最も多いのは農業戸数中の132のそれであり、農家がさまざまな営業に従事しているのである。こころみに1920（大正9）年の「国勢調査」によると（第2表）、職業別構成において農業のウェイトが全県よりかなり高く、工業、商業のそれが低い赤磐郡にあって、農業が全郡よりかなり低く、工業と商業は高く、赤磐郡にあっては商工業の展開がややみられたところである。

第2表 職業別構成

(1920年)

		農 業	工 業	商 業	交 通 業	公務自由業	そ の 他
岡 山 県	男	55.6%	17.2%	10.2%	4.5%	6.0%	6.5%
	女	64.5	19.6	8.9	0.33	2.2	4.5
赤 磐 郡	男	76.0	8.3	6.3	3.2	4.5	1.7
	女	84.8	3.8	7.6	0.16	1.6	2.0
西高月村	男	71.6	10.6	8.8	2.9	4.4	1.7
	女	83.1	6.5	5.8	0.10	1.3	3.1
高 陽 村	男	75.1	8.9	6.5	3.2	5.3	1.5
	女	83.4	5.5	7.7	0.13	1.8	1.5
西 山 村	男	81.4	5.7	5.3	0.91	5.3	1.4
	女	83.1	3.4	7.3	—	2.3	3.9

註 1) 『大正九年国勢調査 府県之部岡山県』より作成。

2) 職業別大分類で本業者についてである。

第3表 西高月村収入構成 (1904年)

	金 額	構 成 比
	円	%
農 産 物	85,610.334	29.1
畜 産 物	129.280	0.04
林 産 物	13,544.550	4.6
水 産 物	772.970	0.26
工 産 物	106,757.800	36.4
鉱 産 物	1,240.300	0.42
商 業 収 得	7,988.940	2.7
副 業	3,557.570	1.2
副 産 物	12,160.631	4.1
労 力	9,444.225	3.2
雑 業	10,790.000	3.7
利子及配当	10,258.220	3.5
小作米・家賃	28,505.794	9.7
不用品売却	1,208.574	0.41
村 外 公 費	727.574	0.25
村 外 公 金	937.500	0.32
合 計	293,833.878	100.0

註 1) 第1表と同一書より作成。

収入額をみると（第3表）、工産物が最大で、ついで農産物で、このほかには林産物が若干である。工産物のなかでは酒が9万3,199円68銭9厘という抜群の大きさで、これのみで全体の31.7%を占める。農産物では米が最大の6万4,536円73銭7厘で、麦がそれにつぐ9,498円77銭9厘というように、農業は主穀生産が中心である。

この西高月村の物産移出入状況を見ると（第4表）、移出額10万7,054円余、移入額3万4,925円余で大幅な移出超過である。この移出の90.5%が飲食物であるが、酒のみで85%で、移出は圧倒的にこの酒である。このほかでは醤油、花菱、竹、野菜である。他方移入の最大は普通農産物で、ついで其他雑品、布及同製品、油類及燃料、水産物、飲食物、肥料などである。個別的には米が最大の27.1%を占め、ついで衣服が16.1%でこの両者が大きく、このほ

第4表 西高月村物産移出入

(1904年)

	移 出	移 入	収 支	部門別構成比	
				移 出	移 入
	円	円	円	%	%
普通農産物	2,325.145	9,933.285	-7,608.140	2.2	28.4
水産物	108.980	3,157.300	-3,048.320	0.10	9.0
飲食物	96,855.100	2,714.203	94,140.897	90.5	7.8
布及同製品	—	5,625.000	-5,625.000	—	16.1
糸類及綿類	462.600	—	462.600	0.43	—
編物及其原料	2,940.000	—	2,940.000	2.7	—
油類及燃料	—	3,625.258	-3,625.258	—	10.4
肥料	—	1,835.000	-1,835.000	—	5.3
家畜・家禽	—	752.500	-752.500	—	2.2
其他雜品	4,362.379	7,283.141	-2,920.762	4.0	20.9
合 計	107,054.204	34,925.687	72,128.517	100.0	100.0
主 要 個 別 物 産	米	—	9,465.370	—	27.1
	野菜類	1,828.342	—	1.7	—
	生 魚	—	1,687.070	—	4.8
	塩干魚	—	889.855	—	2.5
	食 塩	—	580.375	—	1.7
	酒 類	90,991.600	—	85.0	—
	醬 油	5,863.500	—	5.5	—
	麵 類	—	484.640	—	1.4
	砂 糖	—	916.920	—	2.6
	鳥 獸 肉	—	580.375	—	1.7
	衣 服	—	5,625.000	—	16.1
	花 菱	2,940.000	—	2.7	—
	石 炭	—	650.000	—	1.9
	薪	—	739.400	—	2.1
	油 類	—	2,073.850	—	5.9
	牛	—	735.000	—	2.1
	小間物	—	738.000	—	2.1
	家 具	—	876.180	—	2.5
	筆紙墨	—	537.355	—	1.5
	書籍類	—	493.536	—	1.4
	竹	2,304.000	—	2.2	—
	煙 草	—	1,920.050	—	5.5
	履 物	—	1,883.560	—	5.4
	工業用具	—	370.000	—	1.1

註 1) 第1表と同一書より作成。

2) 収支欄の—は移入超過を示す。

かでは、水産物としては生魚、塩干魚、食塩、飲食物としては砂糖、鳥獣肉、
 麺類、油類及燃料としては油類、薪、石炭、家畜・家禽としては牛、其他雜
 品としては煙草、履物、家具、小間物、筆紙墨、書籍類、工業用具である。
 以上の移出入状況はこの村の産業経済の状況を反映しているといえる。

現住戸数571戸のうち、本籍人551戸・2,509人（男1,296・女1,213）、寄留
 人20戸・105人（男55・女50）であって、入寄留者が20戸あるが、本籍戸数674
 戸・2,827人（男1,513・女1,314）とあるので相当数の出寄留者もあると思わ
 れる。1899（明治32）年以降の移入者・移出者の推移は、1899、1900年は移
 入者超過、1901年は移出者超過、1902年は移入者超過であるが、1903年は再
 び移出者超過となっていて、1900年代になった頃から移出者が上回るよう
 になるものと思われる。こころみに、この時期の戸口の推移をみると（第5
 表）、この西高月村の本籍人口に対する現在人口比は全郡より低く、現住人口
 は1912（大正1）年には増加した後、1920年にかけてはかなりの減少を示す
 が、その減少の仕方は全郡よりも著しく、1902年を100とした指数は全県よ
 り小さい。現住戸数は、全郡が1912年には増加し、1920年には減少している
 もののなお1902年を上回っているのに対して一貫して減少している。この
 ように西高月村は岡山県において人口減少傾向の著しい赤磐郡にあって、そ
 れがさらに著しいといえる。

3 農業の状況

現住戸数の約9割が農業であり、農業が中心的産業であった。農村民の生
 活のあり方は何よりも、まずもってこの農業のあり方にかかっている。そこ
 でこの農業の状況を概観する。

本村内の民有耕地は、田241町9反3畝25歩余、畑45町4反7畝3歩であつ
 て、農家1戸あたりは田4反9畝5歩、畑9畝7歩、合計5反8畝12歩とな
 る。しかし、本村の民有地で他村民の所有というものが、田11町4反2畝14歩、
 畑5反3畝18歩あるとともに、本村民が他村に所有するものが田63町9反9畝

第5表 戸口の超勢

			岡山県	邑久郡	牛窓町	邑久村	児島郡	赤磐郡	西高月村	高陽村	西山村
一九〇二年	現住人口	男	606,297	26,056	2,219	1,137	45,234	24,930	1,338	2,179	1,256
		女	575,355	23,399	2,083	992	41,475	22,548	1,245	1,990	1,173
		計	1,181,652	49,455	4,302	2,129	86,709	47,478	2,583	4,169	2,429
	本籍人口	男	609,818	27,296	2,169	1,229	45,627	26,452	1,502	2,402	1,314
		女	564,677	23,937	2,057	1,032	41,519	23,302	1,302	2,089	1,179
		計	1,174,495	51,233	4,226	2,261	87,346	49,754	2,804	4,491	2,493
現住戸数		234,074	10,731	883	425	18,051	8,628	569	880	470	
一九一二年	現住人口	男	636,246	26,862	2,355	1,105	49,579	25,087	1,386	2,246	1,220
		女	613,602	24,732	2,228	1,012	46,763	23,592	1,349	2,100	1,091
		計	1,249,848	51,594	4,583	2,117	96,342	48,679	2,735	4,346	2,311
	本籍人口	男	662,556	28,838	2,377	1,255	50,249	27,810	1,545	2,560	1,385
		女	619,969	25,652	2,235	1,113	46,640	25,112	1,420	2,214	1,187
		計	1,282,525	54,490	4,612	2,368	96,889	52,922	2,965	4,774	2,573
現住戸数		243,147	10,380	911	422	19,685	9,562	542	839	455	
一九二〇年	現住人口	男	631,209	25,759	2,320	1,054	55,097	23,825	1,230	2,266	1,165
		女	633,744	24,536	2,290	999	53,872	22,700	1,205	2,028	1,051
		計	1,264,953	50,295	4,610	2,053	108,969	46,525	2,435	4,294	2,216
	本籍人口	男	698,034	30,233	2,556	1,264	53,930	28,557	1,562	2,709	1,398
		女	633,338	27,797	2,469	1,141	51,201	26,269	1,414	2,343	1,218
		計	1,361,372	58,030	5,025	2,405	105,131	54,826	2,976	5,052	2,616
現住戸数		251,132	10,056	980	445	23,546	9,441	521	838	431	
対本籍人口	現在人口比率	1902年	100.6	96.5	101.8	92.2	99.3	95.4	92.1	92.8	97.4
		1912年	97.5	94.7	99.4	89.4	99.4	92.0	92.2	91.0	89.8
		1920年	92.9	86.7	91.7	85.4	103.7	84.9	81.8	85.0	84.7
指数 (一九〇年=100)	現住人口 現住戸数	1912年	105.8	104.3	108.5	99.4	111.1	102.5	105.9	104.2	95.1
		1920年	107.0	101.7	107.2	96.4	125.7	98.0	94.3	103.0	91.2
		1912年	103.9	96.7	103.2	99.3	109.1	110.8	95.3	95.3	96.8
		1920年	107.3	93.7	111.0	104.7	130.4	109.4	91.6	95.2	91.7

註 1) 各年度の『岡山県統計書』より作成。

27歩、畑17町9畝11歩あり、結局、本村民の所有耕地は田294町5反1畝8歩余、畑62町2畝26歩となり、農家1戸あたりはやや大きくなる。村内耕地の筆数は田4,261筆、畑1,651筆で、1筆あたりは田5畝20歩、畑2畝23歩となる。田の一毛作は52町7反9畝26歩で全体の21.8%で、78.2%が二毛作である。米麦其他雑穀の作付反別は419町3反16歩で、これのみで耕地利用率145.9%と

なっている。牛76頭、馬1頭があり、農耕・運搬用に使用されていた。

この耕地の所有状況を見ると（第6表）、無所有は67戸で全戸数の11.7%に及ぶ。そして5反歩未満が51.1%で村民の過半数が5反歩未満である。他方には50町歩以上が1戸、5町歩から50町歩が2戸、3町歩以上5町歩が9戸で、50町歩地主も存在しているのである。⁽⁶⁾このような所有状況のもとで農業生産が行なわれるが、耕地の自作・小作地別は（第7表）、自作地65.0%、小作地35.0%、田のみについてみると、それぞれ59.4%、40.6%である。他村民の所有する耕地は自作地は92.6%、田のみでは91.9%というように自作地がほとんどで、耕作目的での所有である。なお1929（昭和4）年の町村別小作地率は赤磐郡42.9%（水田のみでは47.5%）、高月村37.3%（41.0%）、高陽村41.4%（44.0%）、西山村43.2%（47.5%）で、ここ西高月村は他村と比較してやや小さいところである。⁽⁷⁾

農家の自作・小作別状況をみよう（第8表）。農家の自小作別構成は、自作31.5%、自小作57.9%、小作10.6%である。他方、専業は54.1%、他業を兼業26.8%、他業から兼業19.1%である。自作農についてみると、専業65.2%で大きく、兼業はいずれも小さい。自小作農は専業の割合は全体よりやや小さく、他業兼業がやや大きく、そして他業からの兼業がやや小さいが、総じて全体に近い。この自小作が最大であり、この自小作の傾向が全体を規定しているともいえる。小作は専業は小さく、兼業はいずれも大きい、とくに他業から兼業が大きい。また、専業においては自作農の割合が全体における自作農のそれより大きく、他業兼業においては自小作農がそうであり、他業から兼業においては小作農がそうである。以上のことから、この農家は、自

（6）北村長太郎編『改正 岡山県地主録——名衆議院議員選挙人名簿』（1894年 細謹舎によれば1894（明治27）年の同村の上位地主および直接国税額はつぎのようである。

馬場藤八郎 994円56銭8厘、馬場惣五郎 183円99銭9厘、馬場清五郎 107円13銭1厘、馬場景五郎 85円22銭1厘、鶴見熊太郎 85円12銭3厘

（7）『農業調査結果』（1929年 岡山県臨時農業調査部）より算出。

第6表 西高月村土地所有状況 (1904年)

	戸 数	比 率	
		%	%
1反歩未満	113	19.9	22.4
1反歩以上	178	31.2	35.3
5反歩～1町歩	136	23.9	27.0
1町歩～2町歩	59	10.3	11.7
2町歩～3町歩	6	1.0	1.2
3町歩～4町歩	6	1.0	1.2
4町歩～5町歩	3	0.6	0.59
5町歩～50町歩	2	0.3	0.59
50町歩以上	1	0.1	0.19
合 計	504	88.3	100.0
無 所 有	67	11.7	...
総 計	571	100.0	...

註1) 第1表と同一書より作成。

第7表 西高月村耕地自小作地別構成 (1904年)

	自作地	小作地	合 計
田	町反畝歩 143.8.7.4	町反畝歩 98.0.6.21	町反畝歩 241.9.3.25
	59.4%	40.6%	100.0%
畑	42.8.8.14	2.5.8.19	45.4.7.3
	94.3	5.7	100.0
合 計	186.7.5.18	100.6.5.10	287.4.0.28
	65.0	35.0	100.0

註1) 第1表と同一書より作成。

第8表 西高月村農家自小作別専兼別構成 (1904年)

	専 業	兼 業		合 計
		他業を兼業	他業から兼業	
自 作	101(65.2)	26(16.8)	28(18.1)	155(100.0)
	38.0	19.8	29.8	31.5
自作兼小作	146(51.2)	88(30.8)	51(17.9)	285(100.0)
	54.9	66.7	54.3	57.9
小 作	19(36.5)	18(34.6)	15(28.8)	52(100.0)
	7.1	13.6	16.0	10.6
合 計	266(54.1)	132(26.8)	94(19.1)	492(100.0)
	100.0	100.0	100.0	100.0

註1) 第1表と同一書より作成。

2) 各欄の下段およびカッコ内は比率。

作専業を一極とし、他業から兼業小作農を対極とする多様な存在形態をとっているが、自作専業とともに、自小作専業と少数ではあるが小作専業が中心的な担い手となっているであろう。そして他業から兼業自作農は雑業中の官公吏、教員などの恒常的職員勤務者のそれがあるいは想定できるであろう。

4 農業経営状況

この西高月村では、1898（明治29）年に西高月村農会が設立されているが、農事改良発達のための事項として21項目をあげている。そのなかに「八 種

苗交換及売買媒介ヲナスコト 十 種子精選ヲ計ルコト 十一 病虫害予防駆除ノ方法ヲ設クルコト 十二 霜害予防法ヲ設クルコト 十三 主要農作物ノ改良保護増殖ヲ図ルコト 十四 排水及利水ノコト 十五 耕作区画及農作路ノ改良修築ヲ行フコト」を農業生産技術の改善目標としている。種子精選，病虫害予防駆除などを農業生産増大の主要な技術改善としている。さらに，1904年には「西高月村農事改良実行規約」が制定されているが，それは「一 米麦種子ノ塩水撰 二 麦黒穂ノ駆除予防 三 短冊形共同苗代 四 稲苗ノ正条植 五 緑肥ノ栽培及堆肥ノ改良 六 稲作害虫駆除予防 七 稲作被害茎剪除」を農事改良上の実行項目としている。このようなことを主要課題とするような生産技術状況にあった。

肥料であるが，これは「他町村ヨリ購入ノ分」というのが2,635円73銭4厘，「村内産出ノ分」というのが7,801円81銭，合計1万437円54銭4厘でとなる。村外からの購入分は25.3%，自村産出74.7%である。村外からは油粕・豆粕が最大で，人造肥料，魚肥，米糠，そして人造肥料を上回るその他がある。村内産出は購入肥料である油粕・醬油粕が若干あるとはいえ，人糞，廐肥，柴草，麦稈などで，自給肥料である。

先にみたような土地所有関係と耕地状況，そして以上のような技術条件で農業生産が行なわれるのである。ここで農業の経営状況を検討してみたい。

第9表は田1反歩水稻作の収支計算表である。収入27円46銭，支出23円98銭5厘で差引3円47銭5厘の収益となる。この支出のうち小作料，農具損料，種子代，肥料代などを除いた6円50銭ほどの労賃部分は小作農の収入となるので，小作農の収入は9円97銭5厘ほどとなる。農民1人耕地面積3反歩として，1年間の収入は31円45銭となる。これは雑業者の年間収入（日雇稼42円93銭，年季雇34円37銭）と比較してよいものとはいえない。

このように小作人にとっては有利とはいえないが，他方地主側にとっても問題が生じている。すなわち，「近来労働ヲ倦怠スルト労働賃金ノ昂騰セルヲ以テ他ニ勞役ヲ売り或ハ転業ヲナサント試ミ目前ノ利ニ迷ヒ，地方養成ヲ怠

第9表 西高月村小作地稲作反当支収 (1904年)

		金 額	備 考
収	玄 米	円 銭 厘 25.08.0	1 石 9 斗 1 石 13 円 20 銭
	屑 米	20.0	4 升
	粃 穀	10.0	
入	藁	2.08.0	130 貫 1 貫 1 銭 6 厘
	合 計	27.46.0	
支 出	小 作 料	15.84.0	1 石 2 斗 1 石 13 円 20 銭
	農具損料	25.0	
	種 子	19.5	
	苗代蒔蒔付 及 苗 採	30.0	3 升
	本田整地 鋤	1.00.0	2 人 60 銭 半 40 銭
	挿 秧	30.0	
	除 草	2.50.0	1 人 夫
	肥 料	1.20.0	
	灌 溉 費	30.0	
	刈 取	30.0	
	稲 扱	45.0	
	乾 燥	30.0	
	臼 挽	45.0	
	俵 拵	60.0	
	合 計	23.98.5	
収 支 差 引		3.47.5	

註 1) 第1表と同一書より作成。

リ施肥培養ニ勉メサルヲ以テ土地ノ生産力ハ年一年減耗シ瘠悪、耕作スルモ利益ナキニ至リ之ヲ地主ニ還付ス。茲ニ至テ地主自ラ之ヲ耕耨セサルヲ得サルニ至ル。之レ皆小作人カ徳義ニ悖テ目前ノ小利ニ迷フノ致ス所ナリ。斯ル風習ハ小作人一般ノ常弊ナリト言フニアラサレトモ往々之レ有ルヲ見ル。小作者中斯ル弊風ヲ生スルニ至テハ地主ノ愛護ヲ失ヒ信用ヲ墜シ自ラ亡滅スルモト言ハサルヲ得ス」ということである。

また、時代の趨勢は、農家の雇人の状況にも変化をもたらしている。この

点について、「近來労働賃金昇騰セシヲ以テ農家ノ雇人ヲナスニ甚困難ヲ極ムル状況。雇人ヲ待遇スルニ拾数年以前ト今日ハ天地霹靂ノ差アリ。食物ハ其度ヲ進メ米麦接半以上或ハ米飯ノミヲ給スルアリ。服役時間モ大ニ短縮シ夜業ノ如キハ女ハ兎モ角男子ハ服役スルモノ稀ナリ。之レ農家カ雇人ニ与ヘタル寛典ニアラズシテ奉公人ノ労働ヲ忌避シ苟安ヲ貪ルノ心増進セルト農家カ雇人ニ対スル寛嚴ノ適度ヲ失スルモノアルニ職由スルカ如シ。畢竟社界ノ風俗ト生活ノ高度ニ余響ヲ受クルモノ又尠シトセズ。是ヲ以テ雇人ヲ得ルハ將來益難境ニ陥レリ」と述べている。

5 農村民の生活事情

この村には50町歩地主が存在することはすでにみた。このような巨大地主が存在し、多くの小作料収入をえているのであるが、それとともに、膨大な株式公債所有、貸付金所有がある。第10表に示すところである。株式所有者42人の平均で、1人あたり2,200円72銭1厘の株券を所有し、119円92銭7厘

第10表 西高月村村民所有公債・株券等

(1904年)

	所 有 額 等			その配当・利子		村民1戸あたり・1人あたり	
	人数	金 額	1人あたり	金 額	1人あたり	所得額等	配当・利子
株 券	42	92,430.300	2,200.721	5,036.927	119.927	188.24.9 38.72.2	10.25.9 2.11.0
株式会社	37	49,970.000	1,350.540	—	—	101.77.2 20.93.4	—
銀 行	5	42,460.000	8,492.060	—	—	86.47.7 17.78.8	—
公 債	9	3,507.500	389.722	175.375	19.525	7.14.4 1.46.9	35.7 7.3
講 金	225	5,521.590	21.653	2,250.000	10.000	11.24.6 2.31.3	4.58.2 94.3
保 險 掛 金	24	3,749.085	156.212	—	—	7.63.6 1.57.0	—
銀行・郵便貯金	731	7,071.235	9.674	381.847	0.522	14.40.2 2.96.2	77.8 16.0
貸 付 金	81	20,117.260	248.361	2,414.071	29.803	40.97.2 8.42.8	4.91.7 1.01.1
合 計	411	125,325.735	304.929	10,258.220	24.959	255.24.6 52.50.3	20.89.3 4.29.8

註 1) 第1表と同一書より作成。

2) 村民1戸あたり・1人あたりは、上段が1戸あたり、下段が1人あたりである。

の配当をえている。公債も9人の平均で389円72銭2厘をもち、19円52銭5厘の利子をえている。また、81人の平均で248円36銭7厘の貸金があり、29円80銭3厘の利子をえている。以上は平均化したものであって、これらのなかにはきわめて大きい株式・公債所有者、貸付金所有者がいるであろう。このような土地持・資産家が存在するが、大方は営々と勤労に励む者達である。大地主が貸金の担保ながれで取得拡大して所有土地からの小作料収入によってえた資金で再び土地拡大に投下する以上に有価証券投資を行い、莫大な配当金をえているとき、農民達は細々とした郵便貯金や、講金をかけて安全弁とし、出費にそなえている。731人が一人平均9円67銭4厘の銀行・郵便貯金を行ない、52銭2厘の利子をえ、255人が一人平均21円65銭3厘の講金を出しあっている。そしてなにがしの負債を負っている。

この年に総額で21万2,001円の負債があるとして、この負債について、「全額ノ百分ノ七十五ハ僅々捨名内外ノ少数者ノ負債ニシテ其余百分ノ二十五ハ全村多数民ノ負債ニシ属シ前者ノ過半ハ不生産ニシテ後者ハ生産的ニ属ス」と記している。いまこの負債の状況をみると（第11表）、普通銀行8万4,382円、農工銀行1,180円で、この両者で40.4%、他町村民11万3,778円、村内個人1万1,886

第11表 西高月村村民負債

(1904年)

	負 債			そ の 利 子		村民1戸・1人あたり	
	人数	金 額	1人あたり	金 額	1人あたり	負 債	利 子
普 通 銀 行	36 ^人	84,382.000 ^円	2,343.944 ^円	11,703.783 ^円	325.105 ^円	171.85.7 ^円 23.83.7	35.35.1 ^円 4.90.3
農 工 銀 行	4	1,180.000	295.000	127.440	31.860	2.40.3 ^円 26.0	49.4 ^円 5.3
諸 種 組 合	8	775.000	96.875	93.000	11.625	1.57.8 ^円 18.9	32.5 ^円 3.9
村 内 個 人	361	11,886.000	32.925	1,426.320	3.951	24.20.8 ^円 2.90.5	4.97.9 ^円 59.8
他 町 村 民	126	113,778.000	903.000	13,653.360	108.360	231.72.7 ^円 27.80.7	47.66.6 ^円 5.72.0
融通講払出金	252	2,830.400	11.232	2,830.400	11.232	5.76.5 ^円 5.76.5	1.18.6 ^円 1.18.6
合 計	787	214,831.400	272.975	29,834.303	37.909	437.53.8 ^円 89.1	90.00.1 ^円 12.49.9

註 1) 第1表と同一書より作成。

2) 村民1戸あたり・1人あたりは、上段が1戸あたり、下段が1人あたりである。

円、そして諸種組合775円である。普通銀行、農村工銀行から借りることのできるのは相当の者であり、多くの農民は、月1割という高利子の村内外の個人からの借金によらざるをえない。全体の75%が十名前後の少数者によるもので、不生産的なものとしているが、普通銀行からの借入金は株式投資の資金調達のためのものであり、他町村民からの借入も資本調達のためであることも想定できる。10人ほどの少数者による負債はこのようなものであるかもしれない。そのほかは高利子の個人融資で、返済に追われていたであろう。

第12表は全村民の家計費支出状況を示す。飲食費64.1%, 被服費10.3%, 雑費6.6%, 日用品消費費6.4%, 社交費5.1%, 家屋2.1%, 教育費1.9%, 祭典費1.3%, 旅費1.3%, 家具0.86%という構成である。

大きいウェイトを占める飲食費であるが、まずこれについて若干の検討を行ないたい。これには米、麦をはじめとして、粟、黍や大豆、小豆などの雑穀豆類、大根、蕪、甘薯、里芋、カボチャ、キュウリ、ナス、ホウレンソウ、シュンギクなどの野菜類、柿、蜜柑橘、桃などの果実類、生魚、塩干魚、乾物などの魚類、鳥獣肉、卵という肉卵類、麺類、豆腐・あげなどの加工食品、醤油、酢、塩、砂糖などの調味品、それに菓子、茶、酒などにいたる、およそ飲食物として消費せられる一切が計上されている。煙草もここにふくまれている。これらのなかの米麦雑穀豆類、野菜類、果実類はその多くが村内産出があり、自家供給の部分が小さくないと思われる。また生魚にもそれがある。このように自給の部分がかなりあろうが、これらを自家生産しないものは購入せざるをえない。さらに米は多くの小作人にとっては収穫の6割以上も小作料として納入してしまうので、自家飯米にもこと欠くことであろう。先にこの村の物産移入の最大が米であることをみた。これは酒米が主であるが、飯米用もあることも考えられる。以上の農産物以外はそのほとんどが購入によらざるをえない。ここでは農産物以外の消費品のうちのいくつかについて消費状況をみよう。肉類は1戸あたり0.136貫・1人あたり0.03貫、卵12個・3個、生魚3.590貫・0.784貫、塩干魚1.005貫・0.22貫、乾物0.211貫・

第12表 西高月村支出構成

(1904年)

		全 村		村 民 あ っ り 平 均	
		金 額	比 率	1 戸 あ っ り	1 人 あ っ り
生 産 費		65,051.457 ^円	22.6 [%]	132.48.3 ^円	27.25.2 ^{円 銭 厘}
家 計 費		109,329.494	37.9	222.66.7	45.80.2
公 費		67,232.393	23.3	136.93.0	28.16.6
負 債 利 子		29,834.303	10.4	60.76.2	12.49.9
小作米并家賃		16,754.550	5.8	34.12.3	7.01.9
合 計		288,202.197	100.0	586.97.0	120.73.8
再掲	家 計 費	109,329.494	37.9 (100.0 [%])	222.66.7	45.80.2
	生 計 費	91,558.938	31.8 (83.7)	186.47.4	38.35.7
	食 物 費	70,044.820	24.3 (64.1)	142.65.7	29.34.4
	被 服 費	11,255.260	3.9 (10.3)	22.92.3	4.71.5
	家 屋 費	2,298.000	0.80(2.1)	4.68.0	96.3
	家 具 費	940.440	0.33(0.86)	1.91.5	39.4
	日用品消費	7,020.418	2.4 (6.4)	14.29.8	2.94.1
	祭 典 品	1,390.955	0.48(1.3)	2.83.3	58.2
	社 交 費	5,575.000	1.9 (5.1)	11.35.4	2.33.5
	教 育 費	2,109.606	0.73(1.9)	4.29.7	88.4
	雑費・旅費	8,694.995	3.0 (8.0)	17.70.8	3.64.3
	肥 料	10,437.544	3.6	21.25.8	4.37.2
	工 業 原 料	40,481.200	14.1	82.44.6	16.95.9
	酒 造 税	51,592.680	17.9	105.07.6	21.61.4

註 1) 第1表と同一書より作成。

0.46貫，麵類1.698貫・0.371貫，豆腐・あげ27個・6個，砂糖4.054貫・0.886貫，菓子0.521貫・0.114貫，酒1斗3升8合・3升，刻煙草0.607貫・0.133貫，巻煙草16個・4個である。

つぎに被服費をみる。そのうちわけは絹被服1,750円50銭，綿被服4,475円34銭，毛被服299円，履物類3,159円12銭，夜具類483円，小間物類738円30銭，

其他350円である。1戸あたり・1人あたりをみると、絹被服0.68枚・0.15枚、綿被服5.68枚・1.24枚、毛被服0.08枚・0.02枚、履物類138.32足・30.21足、夜具類0.31個・0.07個、小間物類14.05個・3.07個となる。被服類は綿が主体であるが、絹・毛もあり、被服類合計で1戸6.44枚・1人1.41枚となる。履物類のこの消費量の大きさは、藁草履、草鞋が主体であることを示すものといえよう。それ相応の夜具類の消費もあり、また数多くの小間物類が購入されている。なお、家具類は1,844点で、1戸あたり3.23点となる。

日用品消費費は4,446円の薪、213円208銭の炭、1,483円85銭の油類および90円97銭5厘の蠟燭という光熱費が中心である。1戸あたりは、薪778.634貫、炭4.667貫、油類1.039斗、蠟燭10.62本となる。先の物産移入で移入において油類及燃料が一定のウェイトを占めていることをみだが、薪も購入部分が大きくなっているのであろう。このほかでは、筆紙墨が355円28銭5厘であるが、これも移入品であることはいうまでもない。新聞雑誌が1戸平均47銭7厘であるが数量はわからない。

社交費は交際費というのが大きく、1戸あたり6円1銭9厘になる。このほかに寄付、訴訟和解及登記料、神仏供物費、諸団体出金、興行見物費、病人見舞がある。合計するとかなりの負担となる。

家屋費は新築・改築・修繕で、新築5棟974円45銭、改築2棟588円、修繕145件735円55銭である。新築の1棟平均は194円89銭、改築は294円で、改築の方が大きい。294円といえば、学校教員平均年収の約2年分にあたり、多額なものといえよう。いずれにしても新改築がみられる。

教育費は諸学校学資(120人)1,434円、書籍(1,552個)493円53銭6厘、筆紙墨代(5,202個)182円7銭である。この村では1900(明治33)年になお学齢に達しながら就学しないものが1名あったが、男児は1902年に、女児も37年には就学率は100%となっている。このような義務教育就学率の達成とともに、この村からの高等教育、中等教育への進学もみられる。この年、官立高等学校5、府県立中学校4、私立中学校4、私立女学校7という在学者がある。諸学校

学資などは少なからぬ部分がこれら上級学校進学者のそれであろうが、一般村民の負担の部分もあることはいうまでもない。

祭典費は鎮守祭費855円、神仏初穂米318円25銭5厘、臨時祭費217円70銭で、1戸あたりは鎮守祭費だけでも1円49銭7厘、全体では2円43銭6厘となる。旅費は1戸あたり2円57銭6厘である。

全体で6.6%を占める雑費は多様なものからなる。第一は婚姻、出産、医療、葬送に関するものである。1戸あたり2円80銭6厘の病人医療費および36銭1厘の売薬代はかなりの負担であろう。また入婚出婚費・死人葬式費も1件あたりはかなりであろう。これらのほかでは郵便料、理髪料がある。また赤十字社拠金、そして犯罪過料金もある。この雑費のなかで最大は講金掛金で、1戸あたり4円41銭6厘である。

以上、生計費の内容をみてきた。資本主義経済が徐々に浸透しつつあることが読みとれるであろう。この調書は農家の消費費生活についてつぎのように述べている。

調査ノ結果ニ徴スレハ、本村ニ於テ家計費ニ消費スル所一戸平均百九拾壹円四拾七銭七厘人平均四拾壹円八拾貳銭五厘、之ヲ以テ敢テ過当ノ程度ト言フヲ得サレトモ、其内容ヲ觀察スレハ奢侈贅沢輕佻浮薄無益ノ情慾ヲ満タサンカ為メニ消耗スルモノ絶無ト言フヲ得ス。今之レヲ有形上ニ徴スルニ、維新前ニ於ケル農家ハ地方屈指ノ資産家ト雖トモ米麦混淆飯ヲ食セサルモノナカリシカ、近年米食ノ徒増殖シ米飯ト米麦混合飯トヲ常食トナスモノ相半ハシ、純麦又ハ粟稗等ノ粗食ヲナスモノ隻影ヲ止メス。魚肉野菜ヨリ副食物ノ如キ価ノ高低ヲ論セス品質ノ優美ナルモノヲ撰用スルニ至レリ。住家ノ如キ平屋草葺ニシテ家内ノ數物ノ如キモ概蓮或ハ莞蓮ナリシカ、今ハ二階造瓦葺疊表ニ起臥セサルモノナシ。家具什器亦之レニ副フ。服装ノ如キ手織木綿ニ草履ハ絹布下駄靴トナリ、紙張日傘ハ蝙蝠傘トナリ、竹皮笠ハ山高帽トナリ、洋装高襟ニシテ胸間時計ヲ着ケ卷煙草ヲ薫ラシ紳士ヲ装フモノ亦少ナカラス。昔時素朴ノ美俗ハ一掃シ蓋シ争フテ世ノ流行ニ後レサラン事ヲ期ス。如此ハ社界ノ風潮ニ浸染セラル、所ニシテ独リ本村ノミ然ルニアラス。是レ一概ニ排却スヘキニアラズト雖トモ其人格ニヨリ生活上ノ必要タルアリ驕奢タルアリ風紀紊乱ノ素タルアリ。之ヲ省セス之ヲ察セス敢テ萍然風潮ヲ趨ヒ猥リニ新ヲ好

ミ奇ヲ街フハ、世ノ進歩ヲ阻碍シ邦家ノ發展ヲ障害シ本村ノ衰運ヲ招致スルモノト言フヘシ。識者大ニ猛省セサルヘカラス。

ここには当該の時期の農村民の生活様式の変容の様相がいくつか描かれている。この描写を先にみた生計費構成や物産移出入とあわせて検討することによって、この時期の生活様相が浮び上がってくる。

第一に食生活であるが、従来の主食は麦、粟、稗、そして富有者でも米麦混合であったが、近年米食がふえて米飯、米麦混合飯が半々となった。先に雇人に対しても十数年前とは異なり、その食事には米飯、または米麦折半となったことをみたが、この雇人への供食をも含めて、大きくかわっている。副食であるが、魚、肉などがふえ、野菜もまた購入するものもあり、これも大きくかわっているところであろう。これは生計費中の飲食費においてみたところであり、また物産移出入において移入品目としてみることができた。

第二は衣生活であるが、従来手織木綿であった衣服は、生計費の衣服でみたように、消費の中心は綿布であるものの、これとても必ずしも自家生産ではなく購入となり、また絹布も使用されている。履物も従来の草履主体からまだ多く草履を使用しながら、下駄そして靴が履かれている。このような衣服、履物の変化とともに、山高帽を被り、洋傘が使われる始め、懷中時計を持ち、巻煙草を喫う者があらわれている。第三に住生活であるが、従来は平屋で草葺、大方は⁽⁸⁾畳ではなく⁽⁸⁾蔭、または蔭蔭であったものが、二階造、瓦葺で、⁽⁸⁾畳が一般的となっている。そしてこれに相應する家具什器をそなえるにいたっている。

(8) 藤沢晋「幕末期農村における階層別住宅構造について一備中国小田郡西川面を中心に」(『岡山大学教育学部研究収録』第21号 1966年 所収)は、「慶応元丑十二月 御道筋軒別畳数書上ヶ帳 関伊勢守領分備中国小田郡川面村」なる文書によって、村民の階層別住宅を検討した興味深い論文である。それによると、「4間取り」の中農層で、来客用の床付きの奥の間を持ち、少なくともそこだけは畳を敷くという状況であり、それ以下の階層ではせいぜい蔭を敷くにすぎなかった、ということである。

第13表 西高月村・大庭村主要品目消費支出高

			西高月村 (岡山県) 1904年		大庭村 (島根県) 1918年	
			1戸あたり	1人あたり	1戸あたり	1人あたり
粳米	石		4.736	1.034	5.097	1.049
糯米	石		0.450	0.098	0.331	0.068
鳥獣肉	円		0.299	0.065	0.326	0.062
卵	個		12	3	23.4	4.5
生魚	円		4.308	0.941	7.338	1.509
豆腐・あげ	丁		27	6	豆腐 50 あげ 29	10 6
砂糖	貫		4.054	0.886	1.731	0.352
塩	円		0.628	0.137	1.872	0.385
菓子	円		0.521	0.114	4.734	0.974
酒	石		0.138	0.030	0.218	0.045
刻煙草	貫		0.607	0.133	0.414	0.085
巻煙草	個		16	4	4.02	0.83
夜具・蒲団	個	夜具 0.306 0.846	0.185 0.067	蒲団 0.100 1.061	0.021 0.218	
履物	足円	138.32 5.533	30.21 1.209	129.53 4.697	26.64 0.966	
新聞雑誌書籍	円		1.335	0.292	1.753	0.361
筆墨紙代	円		0.941	0.206	1.064	0.222
通信運搬費	円	—	—	1.015	0.209	
郵便料	円		0.923	0.202	—	—
理髪費	円		0.859	0.188	2.410	0.496
入婚出婚費	円		0.978	0.214	10.746	2.210
葬儀代	円		0.982	0.214	4.476	0.917

註 1) 第1表と同一書ならびに『農村及農家模範経営事業第二回報告 八東郡大庭村調査書』(1919年 島根県農会)より作成。

いまころみに産業革命の過程で「裏日本」となった島根県の一村との比較によって以上のことがらが示す意味を考えてみたい。第13表は島根県八東郡大庭村と比較したここ西高月村の1戸あたり・1人あたりの消費支出高を示すものである。大庭村は松江市の近郊外で、松江駅まで1里半である。⁽⁹⁾『八

東郡誌』には、1908（明治41）年に隣接の津田村に歩兵第63連隊が設置されて以来近郊農村として発展し、野菜や果樹の生産が盛んとなる⁽¹⁰⁾、とあるところである。この大庭村は1918（大正7）年についてのもので、西高月村のものが1904年で、この間14年ほど隔たっており、米価で1.5倍ほどであることを勘案して比較してみる。肉、魚、砂糖などにおいて大庭村は西高月村に及ばない。また煙草もそうで、とくに巻煙草において著しい。蒲団・夜具類においても数量において同様である。新聞雑誌書籍代、通信費もそうである。逆に大庭村が西高月村を明らかに上回っているのは、塩、入婚出婚費、葬儀代である。西高月村が明らかに大庭村を上回っているものはいずれも近代化にともなう消費の変化・発展を示すものであり、14年前にもかかわらず、山陽の西高月村においては生活面の変化をみることができるといえよう。

なお、「村是」制定の一環として、勤儉貯蓄を図るために、「西高月村勤儉貯蓄規約」を制定している。「第二章勤儉 第三条 本村内居住ノモノハ質素勤儉ヲ主トシ苟モ怠惰奢侈贅沢ノ所行アルヘカラスハ勿論左ノ各項ヲ確守実行スヘキモノトス」として、「勤勉 三大節及記念日并ニ陰暦一月一日 二日 三日 十一日 同二月一日 同社日 同三月三日 同七月七日 同十四日 十五日 同三月七月ノ大師祭 同六月十四日 敷地祭二日ノ外ハ総テ休暇ヲ廃スルコト」とした後、「儉約」としてつぎのことをあげている。

- 一 年頭年尾ニ於ケル物品ノ贈遺 酒食ノ饗応 回礼ノ往復 華麗浮薄ニ流ル、虚飾ヲ禁スル事
- 一 春期ニ際シ方言「メライ」ト称ヘ暴飲暴食酩酊狂放等ヲ招雇スルヲ廢スル事
- 一 五節句ニ物品、重ノ物等ノ贈り合ヒヲナササル事
- 一 出生、或ハ結婚、祝年、内祝、上棟式等ノ節物品ノ贈与、配り物、饗宴等ハ親族ノ外為サ、ル事

(9) 『農村及農家模範経営事業第二回報告 八東郡大庭村調査書』（1919年 島根県農会）による。

(10) 『角川日本地名辞典 32 島根県』（1979年 角川書店）による。

- 一 死亡ノ時ハ質素ヲ旨トシ其部落人民ハ懇切ナル周旋尽力ヲナシ会葬人周旋人等飲酒ヲ禁ス 殊ニ婦人ノ喪服ヲ着用スルヲ許サバル事
- 一 敷地氏神祭臨時祭等ニ三井以外ノ接待ヲナシ或ハ釀酒ノ密釀ヲ嚴禁スル事
- 一 絹布ヲ着用シ（在来ノモノハ此限ニアラス）華美ノ風俗ヲ禁スル事
- 一 諸講会ハ合併スル事
- 一 淨瑠璃 浮レ節 祭文 角力 芝居等ノ諸興行ヲナサバル事
- 一 神社仏閣等ノ寄付配札等ノ授与ヲナサ、ル事
- 一 方言「稲屋」ニハ可成時日ヲ短縮シ其經費ハ凡ソ従来ノ半額ヲ越ヘサル事
- 一 神社仏閣ニ參詣シ土産ノ贈与又ハ祝宴等ヲ廃止スル事
- 一 婦人ノ結髪ニ理容營業人ヲ雇ハサル事

前各項ニ違背スルモノハ其情狀ニ依リ村ニ於テ戸数割ヲ一等乃至十等ヲ進ムルモノトス
これはその多くが伝来のものであろうが、しかし近來はじまったもの、あるいは伝来のものではあろうが派手になるなど変化してきているものが少なくないであらう。このような儉約を唱えることが制定されるほどに、生活習慣に新しい変容したもののつけ加わった状況にきているといえるのである。